二〇二〇年一〇月二日

振り向かぬ子ら見送りて秋の空　みきお
秋寒し島はシャッター街となり　もとこ
月今宵病舎の夫も見ゐるらむ　やよい
カーテンに透けたる影は秋の蝶　む　べ
口笛の音も軽やか秋の空　素　秀
月光に濡れてうつくし大甍　満　天
宮大工秋天背負ひ屋根普請　たか子
合掌す雲一朶なき今日の月　やよい
月今宵夫を迎へにそこらまで　菜　々

二〇二〇年一〇月一日

十五夜の遊ぶ雲とてなかりけり　はく子
斧ひとつ欠けて蟷螂仁王立　素　秀
休耕田コンサートめく虫時雨　ぽんこ
流鏑馬の二の矢金風切りにけり　素　秀
こぼれ萩疎水に彩をちらしけり　やよい
葛の葉の虜となりし重ね垣　む　べ
沈む日の光芒洩るる芒原　凡　士
保育園出て子と仰ぐ今日の月　なつき

二〇二〇年九月三〇日

庭掃除して名月を待ちにけり　三　刀
リモートの面接試験そぞろ寒　みきお
回覧板届けし子の手に梨ふたつ　智恵子

二〇二〇年九月二九日

白拍子祀るほこらや露の秋　たか子
満開の萩うなだれて雨に伏す　こすもす
木の実落つ音に振り向く山路かな　はやと
秋灯し手づれに光る聖書台　菜　々
天空の城の高きに登りけり　凡　士

二〇二〇年九月二八日

群青の大海原へ秋の蝶　凡　士
鰐口を打てば余韻の音さやか　たか子
秋思つく十六羅漢みな伏し目　ぽんこ

二〇二〇年九月二七日

澪標叩いて渡る石叩き　素　秀
栗食めば故郷の山河まなうらに　菜　々
神々の矛より落ちし島は秋　もとこ

二〇二〇年九月二六日

枯山水砂紋に紅きこぼれ萩　凡　士
尺ほどの野仏に添ふ曼珠沙華　智恵子
秋麗や曾孫懐妊のよき知らせ　はく子
老翁がひとり稲刈コンバイン　せいじ
爽涼や肩の力の抜ける朝　明日香